

朝日新聞

(能登半島地震 あのととき医師は) 小児科医、子どもたちとともに：1 炎の輪島、家族は医院は

有料記事

2024年4月22日 5時00分



火災が起きた輪島朝市＝石川県輪島市 

1月1日夕。小児科医の小浦詩（こうらうた）さん（42）は、12歳、10歳、6歳の子ども3人を連れて、石川県輪島市から大分へ帰省していた。

おせち料理を食べてテレビを見ていたところに、能登半島地震のニュース速報が飛び込んできた。

詩さんは2022年12月に夫婦で輪島に開業したばかりの「ごちゃまるクリニック」で、副院長を務める。すぐに夫で院長の友行（ともゆき）さん（44）に連絡した。友行さんは輪島の自宅で、自身の祖母、両親とお正月を過ごしていた。

祖母が家具に挟まれたが、なんとか引きずり出したところだったという。

「死ぬかもしれんけど、逃げる」。ひとまず家族全員が無事なことは確認できた。

その後、ニュースは炎に包まれる輪島朝市の様子を伝え始めた。自宅は朝市通りにあり、火災の発生場所からほど近い。クリニックもそこから数百メートルしか離れていない。

友行さんは、両親らを避難させ、往診バッグを携えて各地の避難所で負傷者の応急処置を始めるという。

詩さんはいてもたってもいられない気持ちだった。

富山で大学時代を過ごし、その後17年に、子どもたちを連れて友行さんの出身地である輪島に移り住んだ。

地元の病院勤務を経て、ごちゃまるクリニックを開業。総合診療医の友行さんと、赤ちゃんからお年寄りまでを受け入れる。

輪島市は年間出生数が80人ほど。少子高齢化が進む街では、子どもたちは小さなコミュニティで過ごす。変化が乏しく、居場所の選択肢も少ない側面がある。不登校の割合が高いとも言われていた。

「クリニックにいるだけでは、みんなの困りごとに気づけない」

詩さんは市立輪島中学校の学校医も務め、保健室での相談会を定期的を開いた。10代の居場所づくりのためのNPOを立ち上げ、クリニックの2階と3階に「わじまティーンラボ」を開設。昨年12月末に開所式をしたばかりだった。(松本千聖)

◆4回連載します。

■ご意見・体験は、氏名と連絡先を明記のうえ、iryo-k@asahi.com ☞ へお寄せください。

朝日新聞のデジタル版に掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.